

鯰絵と市川團十郎像——災害と江戸出版界——

石隈 聡美（國學院大学）

安政2年(1855)の江戸地震直後から、大量出版された錦絵「鯰絵」は、鯰が地震を起こすという俗信に基づいて、主に鯰と庶民の関係性、震災後の庶民の損得二極化の様子が描かれ、災害に対する人々の反応を表現している。その描かれ方は、ただ諍う様子だけではなく、歌舞伎を始め、当時の様々な芸能や流行になぞらえて描かれている。これまで、歌舞伎の演目の中で、とくに『暫』が題材として描かれていること以外に、8代目市川團十郎の当り役が多く描かれていることはあまり知られていなかった。本発表では、歌舞伎を題材とした24点の鯰絵のディスクリプションを中心に、歌舞伎役者が神格化されていく経緯や、それを描くことの意味、さらに災害と江戸出版界の動向について考察を行いたい。

『暫』の「つらね」、『伽羅先代萩』の「床下の場」、『浮世柄比翼稲妻』の「鞆当」など、市川家のお家芸である荒事を描いた鯰絵では、詞書きで團十郎演じる主人公の力強い台詞まわしをパロディ化し、鯰を雄々しく追い払う絵となっている。荒事の世界を鯰絵に描くことは、人々のヒーローを待ち望む様子の表れであり、護符の機能を謳う鯰絵同様、震災下の人々の気持ちを心強くさせるものであったと考えられる。ここに江戸の守り神としての團十郎信仰の一端を見ることができる。

歌舞伎中の浄瑠璃の詞章をパロディ化した鯰絵には、『明烏夢泡雪』や『与話情浮名横櫛』など、8代目團十郎の当り役を題材としているという共通点を見出すことができる。この8代目團十郎が地震の前年の嘉永7年8月に自死し、直後から死絵が流行したことはよく知られているが、これら8代目團十郎を想起させる演目を多く描いた鯰絵についても、同様に追善思慕の現れと考えられる。また、前年に死絵が200枚近く描かれたことが、同じく無届出版物である鯰絵の流行の下地になったという考えを強化することができる。

鯰絵中に表される、江戸から團十郎を失ったため地震が起きたのだという詞書や、次世代の團十郎への期待の言葉から、人々の代々の團十郎への想いを探ることにより、歌舞伎を題材にした鯰絵が、当世風俗を反映したという以外にどのような役割を持っていたのか、提示を試みる。